

【タイトル：イラン短期研修代替・周辺国理解促進プログラム』を通じて学んだこと】

はじめに

本研修は、私にとってこれまでの固定観念を根底から覆し、国際社会における複雑な力学と、現場で生きる人々のリアルな息遣いを同時に体感する極めて貴重な機会となった。日本国内での SIR 訪日研修におけるイランの学生たちとの交流を皮切りに、カタール・ドーハにおけるアルジャジーラ研究センターでの実践的な学び、そしてオマーンでの現地学生との対話に至るまで、すべてのプロセスが私の知的好奇心を刺激し、将来のキャリアに対する明確な指針を与えてくれた。中東という地域は、日本においてしばしば「紛争」「制裁」「エネルギーの供給源」といった一面的なキーワードで語られがちである。しかし、実際に現地に足を運び、そこに暮らす人々と直接言葉を交わすことで見えてきたのは、そうしたステレオタイプとは全く異なる、多様で豊かで、そして深い誇りに満ちた人々の姿であった。本稿では、この一連の研修を通じて私が何を学び、何を感じ、そしてその経験を今後の研究やコンサルタントとしてのキャリア、さらには日本社会全体へどのように還元していくのかについて、4つの視点から詳述する。

① 学んだこと

一連の研修を通じて私が獲得した最も重要な学びは、中東情勢を読み解くための「多角的な視点」と「情報の根源的な捉え方」である。

まず、カタールに拠点を置くアルジャジーラ研究センターでの講義では、マクロな国際政治力学がいかにしてミクロな市民生活に直結しているかを体系的に学んだ。特に、欧米諸国を中心とするイランに対する経済制裁のメカニズムとその実態についての学びは深いものであった。国際社会のニュースでは、制裁は国家間の外交カードや地政学的な文脈で語られることが多い。しかし、私がイランに長期滞在する中で、肌で感じてきた通貨の大幅な下落、それに伴う急激なインフレーション、家賃の異常な高騰といった現象は、決して抽象的な政治問題ではなく、現地に生きる市民の「今日の食卓」や「明日の生活」を根底から脅かす生存の問題である。このマクロとミクロの圧倒的な結びつきを論理的に理解できたことは、国際情勢を俯瞰する上で大きな収穫であった。さらに、アルジャジーラ本社で伺った重信様のお話は、私の情報に対する向き合い方を根本から変えるものであった。「ニュースを選ぶ時点ですでに偏りが生じている」という事実は、メディア・リテラシーの核心を突く指摘である。メディアがどのような言葉を選択し、どのようなフレーム（枠組み）で事象を切り取るかによって、受け手の認識は無意識のうちに誘導されてしまう。アルジャジーラのフロアには、同じ出身国の人間がいらないほど多様なバックグラウンドを持つ人々が集結しており、その極めて多様性の高い環境こそが、単一の価値観に縛られない多角的な報道を可能にしているのだと学んだ。これまで、文献やニュースに書かれ

ている情報がある種の「客観的事実」として鵜呑みにしがちであった自身の姿勢を深く反省するとともに、情報を批判的に読み解くクリティカル・シンキングの重要性を痛感した。また、オマーンでの研修では、中東における国家形成と国民感情のあり方について新たな知見を得た。現在のオマーンの発展と近代化を主導した故スルタン・カーブース国王に対して、現地の学生たちが一点の曇りもない非常に強い尊敬の念を抱いている事実に触れた。これは、民主主義や自由主義といった西洋的な価値観を絶対的な尺度として中東を評価することの限界を示しており、それぞれの国には独自の歴史的背景に基づいた「国家と国民の強い結びつき」が存在することを深く理解する契機となった。

② 気づき・印象に残ったこと

本研修において最も私の印象に残り、今後の人生観にまで影響を与えたのは、フィールドワークの真髄に触れた「地下鉄でのエピソード」と、日本での SIR 訪日研修における「学生たちとの対話」である。

イラン研究の専門家である方から「人々の生の声は、地下鉄に乗って聞くものである」というフィールドワークの真髄を伺った際、私は衝撃を受けた。同時に、私が実際にイランで地下鉄に乗った際のユーモラスな実体験が鮮明に蘇った。当時、車内において明らかに外国人である私に対して、周囲の乗客全員が強い関心を示し、あちこちで私の話題が持ち切りになっていたのを肌で感じたのだ。当時はただ圧倒されて笑ってしまったが、教授の言葉を聞いた瞬間、あの地下鉄の車内こそが、人々のリアルな関心、警戒心、好奇心、そして生の感情が最も無防備に飛び交う「社会の縮図」であったのだと深く納得した。これは、どれだけ高度な学術書を読み込んでも決して得ることのできない、現場の空気感や人々の感情の機微に触れる圧倒的な情報量とその威力を実感する強烈な体験であった。また、SIR 訪日研修において、イランの未来を担う非常に優秀な若者たちと意義深い意見交換ができたことも忘れがたい。私がイランに対して抱いていた魅力や率直な疑問をぶつけると、彼らはごまかすことなく真剣に、そして熱量を持って答えてくれた。彼らの言葉の端々からは、厳しい制裁下にありながらも、数千年の歴史を持つ自国の文化や豊かな資源に対する揺るぎない誇りが感じられた。一方で彼らは、過去に関東大震災という未曾有の被害を経験しながらも復興を遂げた日本の歴史や、現代の高度な技術力・精神力に対して深い敬意を抱いていた。イランも過去に大地震を経験しており、度重なる自然災害によって貴重な歴史的遺産が損失する危機に直面している。この対話を通じて私は、日本の優れた防災技術や免震技術が、イランの古代遺跡や歴史的建造物を守るための強力な助けになるのではないかというインスピレーションを得た。これは単なる技術輸出にとどまらず、両国がお互いの強みと課題を補完し合える、極めて実践的かつ文化的な協業の可能性に気づく瞬間であった。

③ 今後の将来にどう影響するか

大学卒業後、コンサルタントとして社会人の第一歩を踏み出し、キャリアを構築していく上で、本研修で得た「クリティカル・シンキング」と「現場至上主義」は、私にとって決して揺らぐことのない確固たる土台となる。

例えば、私が現在自身の卒業論文のテーマとして取り組んでいた「イランにおけるアフガニスタン難民政策」の研究においても、今回の経験は直結している。難民問題という極めてセンシティブで複雑な事象を分析する際、政府の公式発表や国際機関の統計データ（マクロ）を追うだけでは、政策が現場にどのような摩擦を生み、人々の生活をどう変容させているか（ミクロ）を見落としてしまう。重信様のお話から学んだ「情報には必ず偏りがある」という教訓、そして教授から学んだ「地下鉄の生の声」に象徴される徹底した現場主義は、この論文執筆においても本質を見極めるための羅針盤となっている。この姿勢は、将来コンサルタントとしてクライアントの課題解決に挑む際にも全く同じであると確信している。ビジネスの世界では、膨大なデータやフレームワークを用いた論理的思考力が求められる。しかし、デスクの上で数字をこねくり回すだけでは、真の課題は見えてこない。制裁下の市民生活のリアルや、地下鉄での出来事が教えてくれたように、私は常に「現場（ミクロ）」に足を運び、自身の目と耳で集めた一次情報によって仮説を検証し続けるコンサルタントでありたい。表面的な情報を鵜呑みにせず、「このデータにはどのような前提やバイアスが含まれているか」を常に疑い抜くこと。そして、アルジャジーラで体感した「多様性」を自身の武器とし、一つの視点に固執することなく、多角的な角度から複雑に絡み合う課題を解き明かすプロフェッショナルを目指していく。

④ 経験をどのように社会に還元するか

将来的には、コンサルタントとして培う高度な論理的思考力と課題解決能力に、今回の研修で得た中東におけるリアルな知見を掛け合わせ、「中東と日本の架け橋」として社会に広く還元していくことが私の生涯をかけた目標である。

現状、日本国内のビジネスや一般社会において、中東に対する理解は決して十分とは言えない。依然として「危険な地域」「制裁対象国」「宗教対立」といった一面的なネガティブイメージが先行し、潜在的なビジネスチャンスや文化的交流の機会が失われている。私はまず、ビジネスの最前線に立つコンサルタントとして、現地の優秀で熱意ある若者たちの姿や、オマーンの学生たちが持つ国家発展への情熱など、私が直接肌で感じた「リアルな中東のポテンシャル」を発信し、日本社会に根付く無意識のバイアスを取り払う啓蒙的な役割を担いたい。そして中長期的には、SIR 研修での気づきを発展させ、具体的なプロジェクトレベルで両国を繋ぐ事業を創出したい。例えば、先述した「日本の高度な防災・インフラ技術を用いて中東の歴史的遺産を保護するプロジェクト」や、日本の環境技術と中東の豊富な資源エネルギーを組み合わせたサステナブルな新規事業の開発などである。日本は少子高齢化や市場の縮小という課題を抱え、中東諸国は石油依存型経済からの

脱却やインフラ整備という課題を抱えている。両者は決して遠い世界の存在ではなく、互いの強みを活かして課題を解決し合うことができる最高のパートナーになり得る。

私は本研修での出会いと学びを一生の財産とし、自らの手で日本と中東を繋ぐ強固なビジネスモデルや協業プロジェクトをデザインし、実行していく覚悟である。両国が真の相互理解に基づいた互恵的な関係を築き、共に発展していく未来を実現するための確固たる架け橋としての使命を、これからの人生をかけて果たしていきたい。